第 38 回会員便り

外国語学習のみちくさ

長田　和美

山梨日本語ボランティアの会に入会して４年が過ぎました。
その間、コロナウイルス感染症のため、あまり活動できなかったのですが、それでも学習者の皆さんは、仕事や生活の必要に迫られて、日本語を学ぼうと努力されていました。

反面、私自身の外国語学習はというと、完全にさび付いてしまった英語をはじめ、熱心に学んだけれどもあまりものにならなかった韓国語、現在学習中ではあるものの、発音に苦戦している中国語など、切羽詰まった思いがないせいか、あまり上達せず、のんびりゆっくりと勉強中です。

しかし、外国語学習には語学以外でも、その国に関する興味関心がわいてくるという楽しい側面があります。
映画やドラマを見たり、旅行に行ったりして充実した時間を過ごしています。

たくさん見た韓国映画の中で印象に残っている一作があります。
『国際通りで会いましょう』という、朝鮮戦争時代から現代までの一人の男性の生涯を描いた作品です。
一家で釜山の叔母さんの家に避難する途中、はぐれてしまった妹を探しに行った父親の代わりに、小学校高学年の男の子が家長として家族を守ることを託されます。学力優秀だったにもかかわらず学校に行くことを諦め、昼夜働いて家族を養おうとします。その後もベトナム戦争への従軍、ドイツの炭鉱への出稼ぎと、苦労の連続でした。そんな中でも妻となる女性との恋愛を描いた場面など、悲惨な現実の中でも青春の情感がみずみずしく描かれていて、心が温まりました。

家長などという言葉はもう死語になっているでしょうか。でも、家族を守り、自分の責務を全うしようと懸命に生きる姿は、戦争や国家に運命を翻弄された人間の魂の叫びのように感じました。
（ヤングケアラーとは別で、行政の支援を受けることは当然のこと）

それにしても、韓国映画の題名のつけ方にはちょっと不思議に思うことがあります。この作品にしても、内容の重さを考えると、少しお気軽な感じがしたのですが。他にもペ・ヨンジュン主演の『四月の雪』の原題は『外出』でした。

韓国語を習い始めたころに行った慶州旅行で、古墳にいたカササギ（カチガラス）を見つけました。韓国語でカッチというのですが、激音と濃音で発音します。ツアーガイドさんに発音が違うと何度も直されました。やはり発音は重要ですね。
母語にない音は正しく発音することが、なかなか難しいです。
タイ人の学習者さんで、N２に合格できるレベルの方でも、清音と濁音の区別に手間取るようで、漢字の読み方を教えているときに、しばしば“てんてんある？てんてんない？”と聞かれることがありました。

中国語圏では香港と台湾しか行ったことがないので、現在、中国の方がどんな生活をしているのかはテレビ番組で見聞きするのみですが、私は歴史や古いものが好きなので、古代中国に興味があります。
人々はどのように暮らしていたのでしょうか。
そんな２０００年前の日常生活について、細部にまでわたり、具体的にわかりやすく書かれた本『古代中国の 24 時間』（柿沼陽平著）を読みました。
秦漢時代の庶民の暮らしぶり知ることでき、面白くて知的好奇心も満たされるというなかなか良い本です。

中国歴史ドラマを見ていると、ハンサムな男性が女性に人気なのですが、当時の人にとってイケメンの基準はどこにあるのかも、この本に載っていました。

「かれらはマッチョでなく、色黒でもない。むしろ透き通るような白い肌をもち、瞳を輝かせ、美しいヒゲをもった男子であった。」
潔白皙というらしいです。
「かれらが大通りを歩くと、女性の黄色い悲鳴が聞こえる。女性は積極的で、イケメンの乗る馬車にフルーツを投げ入れたり、馬車をとりかこんだりする。既婚・未婚を問わず、人妻さえもイケメンに駆けよる。」
う～ん、本当でしょうかねー？秦漢時代なんですけど、、、

40 年ほど前、夫が中国を旅行した際に、町で若い中国人男性に声を掛けられ、「僕は日本語を勉強しています。今降っている雨は五月雨ですか。」と聞かれたそうです。
夜間の日本語学校（？）で習っている人だったそうですが、芭蕉や俳句に興味を持っている人だったのでしょうか。
夫は「さみだれ」という言葉を知っていることにとても驚いたそうです。
言語の習得には、やはりその国の人とおしゃべりすることが、上達の一つの方法と言えるでしょう。
私も学習者さんに、できるだけ日本語のシャワーを沢山かけてあげたいと思います。

日本語を教えるようになって、私自身も日本語について改めて勉強しています。真面目な専門書だけでなく、コミックエッセイ『日本人の知らない日本語』で、日本語教師の海野凪子先生のおもしろい体験に笑い転げたり、『すばらしき日本語』の清水由美先生の猫愛あふれる文章に、ほほえみつつ感心したりと。

“日本語っておもしろい！”という思いがますます強くなり、その面白さを外国人の学習者さんに上手に伝えられるように、これからも努力していきたいと思います。